

みんなで作る

SAITAMA
STYLE

埼玉

スタイル



方式

2024-2025



埼玉県障害者芸術文化活動
支援センター

アートセンター集

art center syu 2024 report

社会福祉法人 みぬま福祉会
Minuma Fukushikai



厚生労働省

障害者芸術文化活動普及支援事業とは

障害のある人が芸術文化にふれ、楽しみ、
深めることができる社会づくりを推進する中間支援事業です。

各都道府県に「障害者芸術文化活動支援センター」(略称:支援センター)の設置を推進して、地域における支援体制を全国へ展開しています。

◎都道府県レベル

支援センター

地域内の相談支援、人材育成、発表機会の創出、ネットワークづくり、情報発信など

○ブロックレベル

広域センター

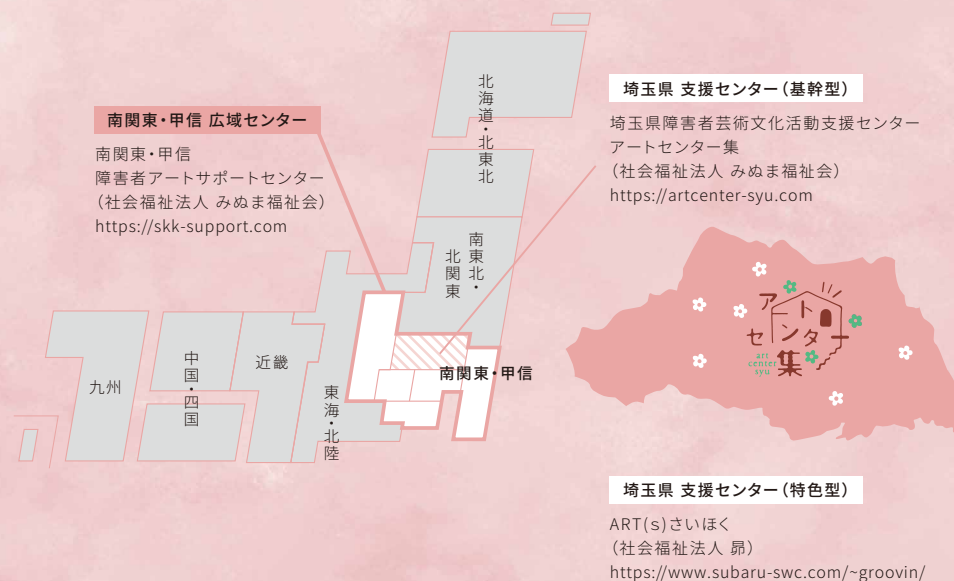
エリア内の支援センターへの支援、地方自治体の基本計画策定支援、ブロック研修など

○全国レベル

連携事務局

全国の情報収集・発信、ネットワーク体制の構築など
<https://arts.mhlw.go.jp>

支援センターでは、各地の自治体や社会福祉法人、NPO法人などが実施団体となり、地域に応じた計画を立てて事業を実施。関係機関や広域センター、連携事務局とも連携し、多様な人々が地域で自分らしく生きることができる社会を目指して障害のある人たちの芸術文化活動の普及に努めています。



「令和6年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

art center syu 2024 report

みんなでつくる 埼玉方式 スタイル

もくじ

障害者芸術文化活動普及支援事業とは	P01
埼玉県障害者芸術文化活動支援センター	
アートセンター集について	P04
実施団体 みぬま福祉会	
工房集とは	P05
官民連携でネットワークを育む	
埼玉独自の普及支援事業のあゆみ	P06
埼玉県障害者アートネットワーク	
TAMAP±Oについて	P07
■タマップ施設見学	P08
■企画展に向けて	P09
みんなでつくる展覧会のポイント	P10
■選考会	P11
□埼玉県障害者アート企画展	P13
event 1 アーティストトーク	P15
event 2 ことばでみる鑑賞ツアー	P17
event 3 わたしたちの目	P18
交流を生む様々な取り組み	P19
■権利保護研修	P21
■グッズ研修	P22
□織り&グッズ展	P23
event ワークショップ&ライブパフォーマンス	P24
□ダンスワークショップ	P25
□演劇で新しい表現を見つけるプロジェクト	P31
ネットワーク活動の振り返り	P32
相談窓口	P33
情報発信	P34
地域での連携事業	P35
埼玉県障害者芸術文化情報	P37

本書では、2024年度の活動を1冊にまとめています。本事業の実施にあたり、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

2025年3月

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター

アートセンター集について

活動理念 芸術文化を通して人と人がつながり、
どんな障害のある人でも、豊かな人生を過ごせる社会を目指しています。



表現することは、
生きることそのもの。
アートセンター集は、
表現活動を通して、
人と人とを豊かに
つないでいきます。

アートセンター集は、埼玉県の基幹型支援センターです。2016年度の厚労省「障害者の芸術活動支援モデル事業」からみぬま福祉会「工房集」内に開設し、2017年度からは国と県の助成を受けて県と連携しながら「障害者芸術文化活動普及支援事業」により運営しています。

埼玉では、障害のある人の表現活動を支援している県内の福祉施設等の職員たちが、活動主体となる「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±O(タマッププラマイゼロ)」(通称タマップ)を立ち上げ、その活動に各事業を連動させる独自のスタイル(埼玉方式)で事業を進めています。表現する人、支援する人、それぞれの課題に向き合い、いろんな人たちとネットワークを育みながら活動に取り組んでいます。

事業内容

埼玉県内の障害のある人の
“表現”と“支援”を社会へ広げるための

- 相談支援
- ネットワークづくり
- 人材の育成
- 創造・発表・鑑賞などの機会創出
及び実施の協力・連携
- 情報の収集・発信 ●実態調査

【主な活動】埼玉県障害者アート企画展、織り&グッズ展、ダンスワークショップ、施設見学、グッズ研修、権利保護研修など

向き合い、語り合い、育み合い
“表現”を支え、広げる

埼玉県障害者
アートネットワーク
TAMAP±O



様々な表現の
可能性を秘めた
障害のある人たち

工房集とは 一福祉の理念にもとづく表現活動の取り組み

どんな障害がある人でも受け入れる—— 重い障害を理由に学校卒業後の進路がない人たちのために、この理念を掲げて1984年にみぬま福祉会は発足しました。「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切に40年経った現在では、埼玉県南部を中心とした通所・入所施設で、300名を超える仲間*たちが過ごしています。(2025年3月現在、相談支援を含め22の事業を運営)

仕事に人を合わせるのではなく、一人ひとりに合わせた仕事をする—— 労働は権利と考え、この言葉を実践する支援の現場で1994年頃、どの仕事にも合わない仲間の想いに寄り添い模索する中から「表現を仕事にする」取り組みが始まりました。その後、紆余曲折を経て多くの仲間たちの活動となり、その表現を社会につなげる活動拠点として2002年にアトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを備えた「工房集」を開設しました。

そこを利用する仲間だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観をつくるために、いろんな人が集まっていこう。そんな外に開かれた場所にしていこう——という想いが「集(しゅう)」という名前には込められています。現在は、11のアトリエを中心に約150名の

仲間がそれぞれのペースで表現を仕事として取り組み、それぞれの好きなこと、得意なこと、その人にかできないことを模索する支援の延長から日々、一人ひとりの表現が生み出されています。

仲間たちの表現は、実に多彩です。その生き生きとした表現が「作品」となることで、本人と周囲の意識に大きな変化をもたらしてきました。既存の手法にとられない創作や、日常の行為から生み出される表現が、多くの人の心を捉えて、美術や障害の固定観念を覆し、新たな価値を社会にもたらしています。工房集では、芸術分野の専門家たちの協力も得ながら展覧会の開催、グッズや作品集の制作など、表現を社会につなぐ取り組みにも力を入れ、近年は、国内外の展覧会への出展や企業とのコラボなどを通して、仲間たちの表現がアートとして高い評価を得る機会も増えています。

——障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、その中から生まれた作品を通じて、多くの人とつながり、関わり、新たな可能性が生まれてきています。

*みぬま福祉会では施設利用者を「ともに働き・暮らし・地域をつくる仲間たち」との想いを込め「仲間」と呼んでいます。



KOBON SYU

埼玉独自の普及支援事業のあゆみ

2009

県内の“表現”の発掘・発信を開始

埼玉県では、「障害者の作品の芸術性・創造性を正当に評価する環境を整えることで、社会に新しい芸術観や価値観を創出できるのでは」といった提言のもと、行政(福祉部障害者福祉推進課)と県内の福祉、美術、教育等の関係者による実行委員会形式で2009年に「埼玉県障害者アートフェスティバル」を開始。ダンスや音楽の公演と共に「埼玉県障害者アート企画展」が始まりました。また、同年に県が「障害のある方の表現活動状況調査」を始め、その集めた調査票から企画展の出展作家を選ぶ独自の選考方法も生まれました。

2012

福祉施設職員が学び合う、展覧会づくりがスタート

企画展では、障害のある人の表現活動を支援する人材の育成にも主眼を置き、2012年からは、県内の福祉施設職員等がアートディレクターのワークショップで学びながら企画・選考・設営・運営までを行う開催に移行しました。

2016~

企画展のつながりを基盤に、支援センター&タマップを発足

この一連の事業に携わってきたみぬま福祉会では、その経験とつながりを基盤に2016年、「埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集」を開設し、「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±O」を発足。以後、企画展は県から主催を受け継ぎ、福祉施設職員をはじめ県の担当者や美術の専門家、弁護士など多様な視点を交えて選考する“みんなで作る展覧会”活動として実施。その開催では、多くの障害のある人に自信や意欲を、また、支援者や地域の人々の意識に変化をもたらし、活動は深まりと広がりを見せています。

“みんなで作る”「埼玉方式」

この埼玉独自のネットワークを軸にした事業活動の継続により年々、障害のある人を中心にした支援の輪も広がり、地域の様々な連携が醸成されています。「埼玉方式」と名付け、県内外へも発信し続けています。

埼玉県障害者アートネットワーク タマップ プラマイゼロ TAMAP±Oについて

県内の福祉施設職員たちが主体となり、いろんな分野の人たちと連携しながら、“みんなでつくる展覧会”(企画展)をはじめ、様々な活動に取り組んでいます。



タマップ 活動のポイント

語り合い、学び合うことを大切に活動しています。

毎月、定例会で情報も悩みも共有

ほぼ毎月、定例会を開き、活動の話し合いや振り返りをしています。対話の時間を作り、支援の悩みなども語り合い、施設の催しなどの情報も交換。コロナ禍以降はオンライン開催が中心になっています。

県との連携を深め、地域活動を活性化

定例会には毎回、埼玉県福祉部障害者福祉推進課の担当職員も参加して、県が関わる展覧会やイベント、作品利活用の案件など、表現活動に関連する様々な情報を提供。参加団体の利用者や表現活動を地域につなぐ機会を増やし、地域との連携も活発になっています。

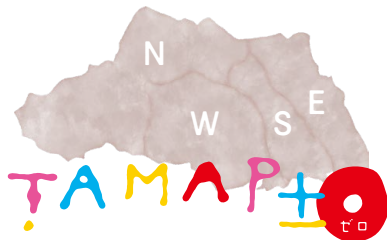
支部長を中心に、支援と活動を全県に普及

東西南北4つのエリアに分け、参加経験の長い団体が支部長を担当。エリアの個人で創作活動をしている人をフォローしたり、研修時にはファシリテーターとなり参加者の想いを引き出したり…。また、同県の特徴型支援センターART(s)さいほくとも連携して、表現活動とその支援の全県普及に努めています。

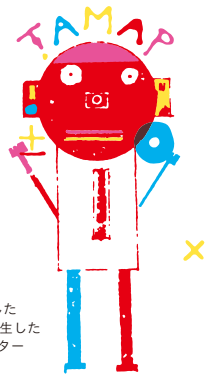
【参加団体】2017年度11団体

埼玉県内の障害のある人を支援している
福祉施設及び事業所

2024年度35団体



「埼玉をアップさせよう」「つながりをマッピングしよう」という想いと障害のあるメンバーの「埼玉は控えめだけ良いところもある、プラマイゼロ」という発言を合わせてネーミング



メンバーから募集した
イラストをもとに誕生した
マスコットキャラクター
「タマップくん」

タマップ施設見学

【概要】表現活動での職員の関わりや支援の在り方を、現場を見て考え、語り合う研修会です。見学者との交流は、実施施設や活動する利用者にも良い刺激になっています。今年度は、2団体の取り組みを見学。コロナ禍以降、オンラインが中心だったこともあり、福祉施設職員同士で「気づき」を深め合うことの大切さも、改めて共有することができました。



「工房集」作家の制作の様子を紹介



「ふらわあ事業所」のアトリエコーナーを
作家自ら案内

5/16 参加者26名

@社会福祉法人 みぬま福祉会
工房集
川口太陽の家



【内容】職員はそれぞれの表現の魅力と共に、それがどう生み出され、どう社会とつながりをつくってきたか、本人と職員の試行錯誤も紹介。絵画や織り、ステンドグラスなどの創作の場では、道具や素材も個別に工夫が施され、各々が自分の居場所でマイペースに活動。自ら見学者に説明する姿も多く見られました。障害によりできないことが多くても、その人にしかない表現を、時間をかけて模索。そこから唯一無二の作品を生み出してきた取り組みに関心が集まり、質疑応答でも支援について多くの質問が寄せられていました。

2/20 参加者30名

@社会福祉法人 清心会
アーティストテラス 634(むさし)
ふらわあ事業所



【内容】「アーティストテラス634(むさし)」は、地域に開かれた表現活動の拠点として昨年、開設。元銀行のオープンな空間に創作の場を設けており、作品がところどころに展示され、作家が直接描いた壁画もありました。高齢になっても好きなことを存分に楽しむといった考えのもと、穏やかな雰囲気を感じられました。「ふらわあ事業所」では、事業所内の作品展を見学。各作家を伝えるキャプションなどアート企画展での経験を活かしているとの説明がありました。音楽活動では、音楽好きな職員と利用者でバンド活動をしており、ライブやSNSでの活動を継続することで、地域のイベントで演奏する機会が増えていったそうです。両施設とも展覧会を開き、地域や家族とのつながりを深めていました。

■「みぬま福祉会」見学の感想より—

○参加者から「ゆったり」「あたたかい」との声があがり、職員からせわしなさを感じなかった。場の雰囲気が安心できることも大事だと改めて思った。
○パーソナリティへの気づきや常にアンテナを張ることの大切さを学んだ。
○職員が同じ方向を向いて支援する姿勢が共有できているように感じた。
○職員も「一緒に悩み内省しながら」という話を聞き、その気持ちで関わっていいと思った。

■「清心会」見学の感想より—

○「最期まで自分の好きなことを」という話が印象的だった。
○秩父を感じる表現が多く地域性を感じた。
○職員と作家の関わりや場の雰囲気がとても学びになった。
○自施設だけではできないことも地域を巻き込んで取り組んでいる話が印象的だった。

企画展に向けて

【概要】 「障害のある人の表現の魅力とは何か」「企画展の意義とは何か」を考え、企画展のコンセプトを共有する研修を、展覧会づくりの第一歩として毎年、内容を検討して行っています。昨年度の選考会では、選外の判断を下す経験から選ぶ責任の重さも共有。そこで今年度は、「選考」を深めることを目指し、作品を見ながら表現にアートを見出す視点を探る、対話型のプログラムを試みました。



6/13 参加者51名
@埼玉県障害者交流センター

「選考する」について話し合う研修
アドバイザー：中津川浩章



発言はグラフィックレコーディングで記録
制作：野際里枝

■感想より■

- 多角的に見る面白さ、自分にはない見方を学べた。
- 様々な捉え方や感じ方があり、感覚が豊かになった。
- 選考以前に大切なものは何かということを感じ取れた。
- 作品から本人や背景を考え、作り手を意識することができた。
- 惹きつけられた作品の背景に作者の日常や特性があると実感し、その感覚を大事にしたいと思った。
- 「余白」も表現。その理由も考えるなど細部への視点を大切に選考することを学べた。
- 選考では想像力を働かせて作品と向き合う必要があると感じた。
- しっかり見た上で背景を知り理解を深める大切さを学んだ。
- 「感じたものに確証を与えるものが背景」という話が印象的だった。

【内容】 前半は、中津川さんと事務局2名によるトークセッション「アート企画展の意義と選考するということ」。過去の選考会で議論となった作品などを取り上げ、「行為の痕跡からアートが問いかけだと気づいた」など、福祉の現場や多様な視点を交える選考から見えてきた、障害のある人の表現の魅力やアートの可能性、企画展ならではの視点を語りました。

後半は、「作品を見ながら語り合う」グループディスカッション。工房集の作品を囲み、ファシリテーターが「どう感じたか」「作者はどんな人だと思うか」といった感想を引き出し、そこから表現活動や展示の仕方などの話に展開。各班とも想像や視野を広げて、対話を深めていました。

最後に、作品が生まれた背景や作者について、工房集スタッフや中津川さんが解説。改めて、日々の表現に向けるまなざしの大切さや、選考には答えがないからこそ多様な視点で語り合うことに意義があることを、確かめ合いました。

- 良い作品だけでなく問いかけを感じるかをポイントに選考にのぞみたい。
- 作品の一つひとつに価値をつける。その意識を常に持ち続けたい。
- 「心を揺さぶられる」に加え「社会に発信する」を前提にどう意味を持たせられるか。選ぶ責任も自覚しなければと思った。
- 作者のモチベーションに影響することを考えると選ぶ責任の重さを感じた。
- わずかな行為も見逃さず寄り添い、長く見続けることでアートになることを実感。意欲が湧いてきた。
- 利用者の感性にスタッフの感性が伴い作品が生まれている。そこが障害者アートの面白みで強みにもなると思った。

みんなで作る展覧会のポイント

—“表現”をアートへ「埼玉県障害者アート企画展」プロセス—

“支援のまなざし”を育む—— プロセス

企画から設営までのプロセスでは、単に展示手法を学ぶのではなく、監修を務めるアートディレクター中津川浩章さんの協力を得て、企画展の意義を問いながら、一つひとつの表現と向き合い、語り合うことを大切に取り組んでいます。

“これってアート?”も発掘する—— 調査票

障害のある人やその支援者に調査票を提出してもらったちで行っている県の「表現活動状況調査」では、作品がどうかわからない表現にもアートの可能性があることを伝えて提出を求めています。それにより毎回、既成概念にとらわれない“アートの原石”から、アートとして高い評価を得ている作家の新作まで、多彩な表現が集まります。

福祉、美術…多様な視点を交える—— 選考会

出展作家を決める選考会では、集めた調査票すべてに選考委員全員が目を通して一次選考を行い、本選考会では美術、法律、教育などの専門家と共に話し合いながら選考しています。調査票のコメントから、表現がどのように生み出されたのか、その背景や作者の想いを知ること。また、専門家たちの見解を知ること、固定観念が崩されたり、表現の見え方が変わったり、対話が深まったり…。その選考での視点や、表現の魅力が作品展示に活かして、多彩な表現が一堂に会する埼玉県独自の展覧会をつくり上げています。

人間にとってアートとは、
表現とは、障害とは…
問いかけてくるような
障害のある人たちの表現が
アートの可能性を広げ

社会に新たな価値をもたらしています。

“表現”と向き合い、みんなで探り、深め、広める。
その一つひとつのステップで得た気づきを、
日々の支援につなげています。

“支援のまなざし”を育む 展覧会実践のステップ

日々の表現と向き合う

日常の行動や行為にも目を向け
なぜこの表現なのかその想いを考える

「これってアート？」も発掘

表現が生まれた背景や作者のことも記載
表現活動状況を調査票を提出

企画展に向けて語り合う

障害のある人の表現の魅力とは、アートとは…
何のために何をどう発信するかを考え
コンセプトと意義を共有

多様な視点を交えて選考

みんながキュレーターの意識で
様々な観点から一人ひとりの表現の魅力を探り
出展作家を決定

タマツの連携力を活かして広報

タイトルやチラシなどコンセプトのイメージを共有
企画展の意義を広める

魅力をどう伝えるか考えて展示

コンセプトを踏まえて見せ方を工夫
「作品」として改めて見て語り合う

埼玉障害者アート企画展 たくさんの想いを交流させる

作家イベントや交流の機会をつくり
施設や家族での“みんなで鑑賞”も推進
運営も担い多くの感動と評価に触れる

みんなで振り返る

企画展を通しての作者や周囲の変化を語り合う
改めて意義を考える
気づきを日常と活動へつなぐ

選考会

【概要】今年度は、約600件の調査票から150名の視点を交えて128名の出展作家を選出しました。県の調査からは毎回、美術の専門家たちを唸らせる新たな表現が発掘され、また、常連作家の表現も年々パワーアップしています。その驚きや感動と選考の難しさを共にしながら、それぞれが企画展の意義やコンセプト(意味合い)を踏まえて選考にのぞみました。



本選考会の様子

キュレーターの意識で

ミニ選考会

7/18~27 参加者合計約150名

【内容】まず、各団体・専門家によるミニ選考会(一次選考)で、全調査票(デジタル画像)から各々最大80名を選出。その集計結果の上位を仮決定としました。参加団体には、表現活動について話し合うきっかけとなるよう複数名での選考を条件にしており、それぞれが状況に合わせて選考方法を工夫しています。「職員が利用者の日々の行動を表現として考えることができるようになった」といった感想も聞かれました。

企画展の様々な意味合い

- 県内の作家の幅広さを紹介する
- 美術の専門家以外にも福祉施設職員などの様々な視点も交えて「表現とは何か」を問う作品を発掘する
- 施設に所属しない個人や相談者を社会につなぐ場でもある

多様な視点を交えて 本選考会

8/27 参加者60名
@埼玉県障害者交流センター

【内容】今年度は対話の時間を増やし、まず、仮決定した出展作家93名の調査票を全員で確認しながら、選んだ理由や選ばれた作者の話、権利侵害で気になる点など自由に発言し、様々な観点を共有。続いて各選考委員が推薦する追加候補27名の調査票をスライドに映し、選出理由を聞いて意見交換。最後に選考の感想を共有しました。

本選考会参加者(五十音順):石上城行(埼玉大学教育学部教授)、岩本憲武(弁護士)、久保田友理子(アーティスト)、小澤基弘(画家/埼玉大学教育学部教授)、酒井道久(彫刻家/埼玉県立大学名誉教授)、杉千穂・山口里佳(コーディネーター/con*tio)、高田悠希子(戸田市立美笹中学校美術教諭)、武居智子(編集者)、中津川浩章(美術家/アートディレクター)、前山裕司(新潟市美術館特任館長)、埼玉県福祉部障害者福祉推進課2名、福祉施設職員39名、個人1名、事務局5名。



■本選考会の感想より

- 近くの人と自由に話すことで新たな視点を得ることができた。
- 作家と創作の背景を知ることによって作品への愛しさが増していった。
- 推薦作家の選考は作品の背景を知る時間となり勉強になった。
- 専門家の感想から作品や作者に対する感じ方が学びになった。
- 先生方の感性や作品の見方などを聞くだけでも参考になった。
- 他施設の活動の様子を聞いたり、作品から刺激を受けたり、施設の創作活動に活かせる点も多かった。
- いいと感じる作品が多く選ぶことが難しかった。

- 著作権のルールを当てはめ過ぎると表現の幅が狭くなる難しさもあると感じた。
- 支援する人たちの努力や愛情が素晴らしいと思った。
- 集まり選考に携わること自体に意味があると思った。
- 調査票を見て全員で話し合いの反応を見ながら決められたのが良かった。
- 「落とす」ではなく「拾い上げる」感じで楽しく選考できた。
- 作品画像のみの選考で公平性は上がったが、実際に全作品が見られるとより質の高い選考になると感じた。

埼玉県「障害のある方の表現活動状況調査」について

表現活動*には、多様性を尊重し、人と人の相互理解を深める力・可能性があります。埼玉県では、障害のある方の表現活動をサポートし、障害の有無にかかわらず、多様であることを認め合うことができる豊かな社会を目指しています。

*表現活動とは、絵画や造形、演劇やダンスなど、何らかの作品を創り出す活動を言います。何の表現かよくわからない作品、これで良いか悩む作品でも、ぜひその情報をお寄せください。今までの常識を覆すような芸術性、創造性あふれる才能が隠れているかもしれません。

目的

表現活動を把握して今後のサポートにつなげていくための調査です。

対象

県内在住の方々。

方法

本人やその支援者から「調査票」を提出してもらっています。必要事項の記入と作品等の画像の添付をお願いしています。

詳しくは県のホームページをご覧ください。

<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0604/hyougenchosa.html>



お問い合わせは、
埼玉県福祉部 障害者福祉推進課
(社会参加推進・芸術文化担当 TEL:048-830-3312)
または
アートセンター集(TEL:048-290-7355)



埼玉県障害者アート企画展



【概要】 企画展では、県内の多彩な表現を発信して、社会にその可能性を問い続けています。今年度は、128名の600点を超える作品を紹介。来場者は過去最多の2045名を記録しました。イベントでは、恒例の「アーティストトーク」に加え、会場の埼玉県立近代美術館と連携して視覚に障害のある人との「ことばでみる鑑賞ツアー」も開催。新たな鑑賞への視点と交流を得ることができました。

12/4-8 出展作家128名
来場者2045名
@埼玉県立近代美術館 一般展示室1.2

第15回埼玉県障害者アート企画展
「Coming Art 2024」

監修：中津川浩章

主催：埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O、
社会福祉法人みぬま福祉会
共催：埼玉県、埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会

【内容】 展示会場の設営や運営も、タマップの福祉施設職員たちが学びながら協働で行っています。設営では、監修の中津川浩章さんからのディレクションを受けて、作家一人ひとりの個性や表現の幅広さが伝わるように、試行錯誤しながら展示。それにより毎回、多種多様な作品が異なる輝きを放ちながら共存する、企画展ならではの展示空間が生まれています。また、作家が主体となるイベントを継続し、作家やその家族、参加施設などへ積極的に鑑賞を促してきたことで、近年は、進んで在廊してくれる作家や施設利用者の来場が増え、会期中は、作品や作家を囲み、様々な人たちが語り合う光景が日常化しています。今年度は、周辺地域の小学生たちも多く訪れ、さらに会場が温かな雰囲気にも包まれていました。



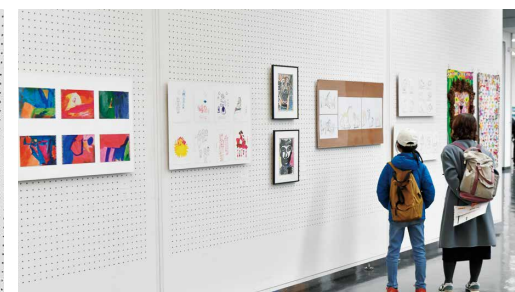
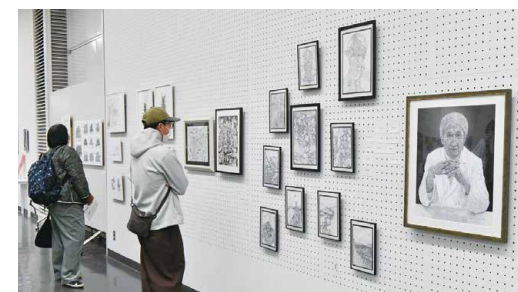
「Sunbird(サンバード)」ビクター・タン



「花」 恩田貴弘



「メトロ銀座線」「東京メトロ入口」 福島尚



■開催に寄せて—

15回目になる埼玉県障害者アート企画展。当初、障害がある人たちの魅力的な表現を福祉的視点も含めた“調査票”をもとに審査するという形式で始まった。最近では調査票もさることながら、福祉施設で働くスタッフのリアルな現場感覚をより反映させるような形に変化してきた。審査会はアート、デザイン、教育、福祉、法律、行政といった多様な専門性を持つ方々が、丁寧に対話を重ねながら進めてきた。かつてはアートの専門家の意見を福祉関係者が拝聴するような傾向があったが、いまでは逆に福祉現場スタッフから作品の背景が語られるとアート関係者がそれを聞いて唸り、感心し、質問してくる場面も増えた。“福祉とアート”が交錯し価値を生み出すスリリングな瞬間、まさに最近よく目にする「福祉×アート」という言葉の実践を具体的に押し進めてきた結果だ。

非言語のコミュニケーションの中から生まれてくる「表現」の数々。“読めそうで読めない象形文字のような線”、“紙をはみ出して部屋の壁にまでドローイングする人たち”、これは芸術なのか、たんなる表出なのか、あるいは無意味な行為の反復なのか。すべての作品には「生きる」というメッセージが刻印されている。なにが私たちの人生を社会をそして福祉現場を豊かにしていくのか。問いかけてくる展覧会です。

監修：中津川浩章(美術家・アートディレクター)



「羊になれたら」「クリスマスパレット」 雨星むら



「新幹線」森川里緒奈



「ポチャリンドルの運動会」平川寛隆



無題 松崎悠希

event 1

アーティストトーク

12/7 出展作家21名

出展作家が自ら、または担当職員や家族と共に作品について語る恒例のイベント。今年度は21名が参加しました。「なぜ、その表現なのか」、その表現に至る経緯や想いに触れることで、まなざしが作品の奥深くへと誘われます。作家と社会をつなぐ機会は、まさに「作家が主体」となり、原稿を手にして心の移ろいを語る人、聴衆に問いかけて関心を引き出す人、場を明るく盛り上げる人など、アプローチも多彩で、その可能性を広げる活動へと発展しています。



成澤瑞穂さん



企画展に毎回のように選ばれている作業所の仲間をリスペクトして創作を開始。「アタマの中のビックバン」(右)には身近な人物や施設にゆかりのあるモチーフが緻密にどこかユーモラスに描かれています。「仲間の絵と並ぶように飾らいたい」という夢が実現してありがたい!という笑顔を見せていました。



清貴さん

Coming Art 2024

Coming Art 2024



鳥が好き。「MN window」(右)では、抽象画のつもりが無意識のうちに鳥のモチーフを描いていたそうです。いろんな作風や手法で、その時表現したいものを形にするため失敗もあるが、「できない部分も含めて私」と素く語る姿が印象的でした。

プルタブをつないで立体にした「超高級アルミビル」。「150階で、150億円。中に部屋、温泉、ゲームセンター、洗濯場所、最上階にはバーベキューもご紹介します。完成したら遊びに来てください!」ととてもうれしそうに紹介。集めたたくさんプルタブを、「触れてみてください!」とすすめて、来場者もその素材感を楽しんでいました。



浅野勉さん

当初は花瓶などの陶器を制作していましたが、施設の仲間の描く猫の絵に影響されて、写真を見ながら猫のオブジェを制作。「寝ころがる猫」は、青い釉薬が溶けている感じがお気に入りのようです。



石井健知さん



山崎利之さん



古川舜一さん



三宅史洋さん



なお丸さん



吉野孝紀さん



参加した神谷羽菜さんの作品



尾崎翔悟さん



野村真優子さん



参加したD.J.E.J.さんの作品



安田拓海さん



関口直子さん



関翔平さん



甲村哲之進さん



横井雅美さん



及川礼さん



石井章さん



竹内君恵さん



event 2
ことばでみる鑑賞ツアー
(埼玉県立近代美術館との連携プログラム)

12/6 参加者17名
○視覚に障害のある人6名
(ガイドヘルパー4名)
○視覚に障害のない人6名
○ファシリテーター5名

企画協力: con*tio、武居智子

視覚に障害のある人とない人が対話しながら作品を楽しむ鑑賞会を、その草分けの活動に携わってきたコンティオの協力と、埼玉県立近代美術館との連携により2部構成でプログラム。一般からも参加者を募り、タマツの施設職員や県職員も交えて開催しました。まず、参加者17名が5つのグループに分かれ、約1時間、展示作品を自由に鑑賞。続いて講堂に移り、美術館所蔵のユニークなデザインの椅子を美術館の学芸員やガイド・ボランティアの案内により体験した後、全員で感想を共有しました。感想からは、視覚に障害のある人にもない人にも、鑑賞の深まりが感じられました。展示会場には、作家の協力により十数点の触れる作品があり、作家も数名在廊。視覚に障害のある参加者からは、じっくり触りながら対話して「様々な技法や工夫がわかり、作者の意欲が伝わってきた」、作家との対話から「エネルギーをもらった」との感想も。一方、「触る」や「説明」より、会話からイメージを共有する方が作品を楽しめる」という意見や、スマホで撮った作品をAIが解説する機能の情報提供もあり、関係者を含めそれぞれが「ことばでみる」を考える有意義な時間になりました。障害により普段、美術館に足を運ぶ機会がなかった参加者には、次の鑑賞につながる体験となり、また、広く広報したことで県外や多方面からの参加・見学が多く、視覚障害者の鑑賞の課題を問う新聞記事にもなるなど、連携力による成果も多い催しになりました。



■視覚に障害のある参加者の感想より■

- 目で見た経験がないためイメージがつかれないと思っていたが、質問や対話を重ね、言葉を通して作品の魅力を楽しむことができた。色や形を身近な物に例え、印象などをそれぞれの言葉で表現してくれたことで、様々な角度から想像して、いろんな感情が味わえた。色の使い方や筆の動かし方で感情表現が違うことも知ることができた。
- (障害になる前)見ていた作品とは違った作品を鑑賞できて感動した。つくりたいという気持ちが沸々と湧いてくる熱を感じた。
- 作家が私の手を取り、力強く塗られた絵の具に触れて、その想いが伝わってくるようだった。
- 針金の作品から、想いがいっぱい詰まっていることを感じた。
- デザイン椅子も美術館自体も素敵で、すべてが楽しい体験になった。

■他の参加者(ファシリテーターを含む)の感想より■

- 一人で見ていたよりもずっと深く見るのだなと感じた。
- 各々の見えていないものを補いながら作品の奥に行けるようだった。
- 自分も作品に入り込んだ感覚があった。
- イメージが膨らみ、相手の中にイメージがどう描かれているのかを想像することも楽しく、また、伝わるものがあると感じた。
- 丸が描かれた作品での対話で(視覚に障害のある参加者から)「安定」という精神的なキーワードが出てきたことが印象的だった。
- いろんな角度から作品を見ることでの気づきがたくさんあった。
- いつもとは全く違う鑑賞ができた。相手の好奇心も伝わってきた。
- 初対面でも仲良くなれて、それぞれの感覚のズレも楽しめた。
- 説明ではなく、自分の言葉で作品を伝える難しさを改めて感じた。

event 3 作品鑑賞プロジェクト
わたしたちの目

企画協力: 上尾市立原市中学校、戸田市立美笹中学校

教育普及の鑑賞体験企画として県内2校の美術部の中学生19名による作品鑑賞の感想文をパネルで紹介。その視点と瑞々しい言葉が来場者の心にも響いていました。



交流を生む様々な取り組み

アンケートには、過去最多の730名から感想が寄せられ、また、新聞各紙にも大きく取り上げられました(掲載の詳細はP34)。企画展では、イベント以外にも交流と鑑賞を促す取り組みに努め、多彩な「作品」による感動を様々な人と共有する中から、来場者にも作家にも周囲の人々にも、新たな気づきや意識の変化がもたらされています。

魅力を伝える 展示の工夫

一部の作品には、表現がどう生み出されたのかを伝える、キャプションや画像も添えています。



Untitled 田中啓示

1本のクレヨンを使い切る勢いで、画用紙一面、裏まで塗っていく。制作中はひたすら画用紙を食い入るように見つめ、すばやく左右斜めに腕を何度も動かす姿は躍動感を感じる。はじめはボールペンを使っていたが、同じ机で制作するメンバーが使っていたボスカやクレヨンにだんだん興味が湧いて、手に取るようになり画材の幅が広がった。その時によって気に入っている画材があったり、次々と新しい色を重ねてみたり、周りのメンバーの影響を受けながら作品も変わり続けている。また、手についたクレヨンを壁で拭い、その重なりで壁一面が大きなキャンパスのようになり、制作の痕跡が生々しく残っていて迫力を感じる。

作家が主体となる 場づくり

オープニングセレモニーのほか取材も作家に協力を依頼。年々、自らが在廊する作家が増え、今年度も来場者や他の作家と交流する姿が多く見られました。また、会期中は、来場した作家や会場の様子を随時、SNSで発信しました。



埼玉新聞
2024年12月8日WEB版より

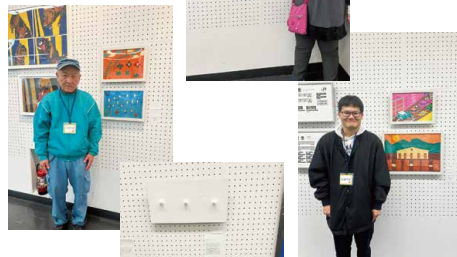


“みんなで鑑賞”を促進!

今年度も多くの作家やその家族、福祉施設利用者や職員が来場しました。



今回は50名を超える作家のSnapをSNSで配信!



様々な交流により創作のモチベーションもアップ!



作品集の制作・販売 事業や活動もパネルで紹介

企画展会場では作品集の販売のほか、作家関連商品(画集やポストカードなど)の委託販売、創作風景映像の上映などを実施。また、タマップの活動や県の事業のポイントを展示パネルにわかりやすくまとめて紹介しています。



アンケートの実施

紙とWEB入力で積極的に回答を求め、寄せられた感想は作家やタマップ参加団体にもフィードバックしています。

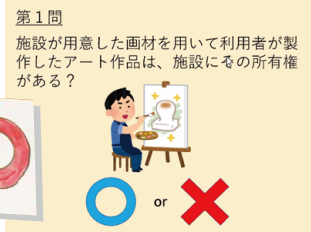
■来場者の感想より—

- どの作品も思わず声が出てしまうほど素敵で圧倒され感動しました。
- 心に刺さり入ってしまう作品も多く、4時間かけて鑑賞しました。
- 一つひとつの作品に、その人が生きた時間、周囲の人との関わりが表れているようで、どの作品もとても見応えがありました。
- 想像を超えた作品の輝きに感動。アーティストの方々の生きる力を感じ心が彩られました。スタッフのサポートも素晴らしいと思います。
- アートには境界線がないことを実感しました
- 3回来ました。現在、病気で色々な活動をやめています。ここに来てエネルギーを頂きました。生まれてすぐに見たであろう花とか動物など自分自身の過去から現在に至る時の流れを作品の端々に見てアーティストのみなさん&自分の人生もなかなか素敵だと感じました。
- 以前見た作家の作品がさらにすごくなっていて、初めての方の作品も素晴らしく、より多くの人に見てもらうことに意義があると思います。
- 作家さんとお話ししながら鑑賞でき楽しい時間を過ごしました。
- 全作品が「見てください!」と言わんばかりに美しく額装され、個性を大事にしながらも秩序を持って飾られ豊かな展覧会だと思いました。



権利保護研修

【概要】 作者や作品を守るために、表現活動に関わる法律や契約の知識を楽しく学ぶ、参加型の研修会を行っています。今年度は広く参加者を募り、会場とオンラインで同時開催。また、毎回わかりやすいと好評の岩本弁護士による〇×クイズの解説に加え、事例の紹介を増やし、支援の現場に役立つ内容を充実させました。



配布した〇×カードは
作問の手づくり

2/6 参加者33名
@埼玉県障害者交流センター
及びオンライン(ZOOM)

「これって大丈夫? こんなときどうする?
障害のある人の表現活動
著作権に関するクイズで学ぶ法律知識」

講師: 岩本憲武
(弁護士/岩本法律事務所)

【内容】 企画展の選考委員も務めている岩本弁護士が、表現活動の現場に即した事例や最新情報を交えて、作品発表や商品化、二次使用の際に、知っておきたい権利に関する法律や契約の知識を解説しました。〇×クイズの10の設問では、著作権の内容や所有権との違いなどを、イラストを使ってかみ砕いて説明。「写真にも著作権がある」「所有権と著作権は異なる」といった要点を押さえ、作者との同意書や作品販売時の覚書の説明では、みぬま福祉会の事例を取り上げて説明していきました。

また、今年度は事務局からも、作品と一緒に支援にまつわる事例を紹介。「著作権は主催者に帰属」との要項に気づかず展覧会に応募した失敗談や、作者が写真を撮るようになったことで他人の写真を模写しなくなり、権利侵害の心配がなくなった話などを伝えました。

参加者を公募したことで、障害のある人の家族や遠方からの参加もあり、具体的な質問も多く、作品盗用被害に関する相談の回答からは、「制作日の記録が証明になる」ということも学ぶことができました。

■質問・相談

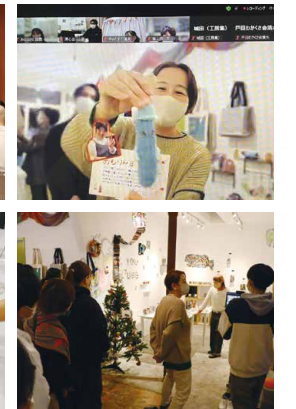
- AIによる創作物の著作権
- 著作権の保護期間延期
- プロレス選手の写真入りポスターを描いた作品の公表
- 戦隊ヒーローを描いた作品の公表
- 作家がデザインした紙を購入して作ったグッズの販売
- 作品盗用被害 …などについて

■感想より

- クイズ形式で楽しみながら基本が学べた。
- わかりやすく丁寧な説明で勉強になった。
- 事例を使った解説でわかりやすかった。
- 曖昧だった部分を明確にすることができた。
- 改めて理解が深まり大変勉強になった。
- かわいい〇×カードでクイズに参加でき楽しかった。
- 工房集の事例は学びが多くなった。
- 作品づくりの参考になる内容がたくさんあった。
- 質問に丁寧に答えてもらえてありがたかった。
- 家族として学ぶ場がもらえてありがたかった。
- 曖昧だった部分を守っていけるようになりたいと思った。
- 怖さにも気づくことができた。
- 商品コピーの著作権などの話が新たな学びになった。
- どうトラブルを防ぐかという視点をもう少し学びたかった。

グッズ研修

【概要】 「何のための商品化か」を考えることを大切に、福祉施設のグッズ制作を支援している con*tio(コンティオ)の導きで、相談をもとに学び合う研修を行っています。昨年度はオンラインが中心でしたが、試作品をじっくり見ながら活発に意見交換ができるように、第1回は対面で実施しました。



7/19 参加者25名
@埼玉県障害者交流センター

10/17 参加者22名
@オンライン(ZOOM)

12/19 参加者29名
@工房集アトリエ
及びオンライン(ZOOM)

講師: 杉千種、山口里佳 (con*tio)

【内容】 研修では、制作の悩みを共有しながら品質の向上を目指し、その学びが各施設での活動に活かされています。近年はグッズ展に向けての相談から、各施設の強みを活かしたコラボ商品も生まれています。

今年度は初参加の職員が増えたため、第1回の前半をコンティオの2人による講義とし、「福祉施設ならではの商品の魅力とは」「施設内で商品化に取り組む意義とは」といった表現の魅力を新たな価値に変えるための、大事な視点や考え方を学びました。後半は、相談者が持参した試作品を囲み、みんなで語り合う相談会。「なぜこの素材を選んだのか」「どうデザインしたら作者の想いは伝わるか」といった2人の問いかけとアドバイスを中心に、感想やアイデアを出し合って改善策を探りました。

「織り&グッズ展」は、展示や販売を学ぶ研修の場でもあります。第3回はその実践を踏まえ、2人が会場で、出展商品の良い点や改善点、ディスプレイやパッケージ、ポップなどのポイントを解説しました。

■1回目の感想より

- グッズ化が「支援を深めることにつながる」という根幹を再確認。
- 「売ればいい」ではなく、主役の利用者の魅力の発信を大切にしたいと考え、工賃アップの課題はあるが、「支援力アップにつながる」との話を聞き、自信を持って活動を続けたいと思った。
- 障害者施設のグッズは「手づくり」や「1点物」が強みと思っていたが、それだけでなく施設の「ブランド」が必要と知り学びになった。
- 他施設の商品やアドバイスなど参考になることが多く、勉強になった。施設でも何かつこうと思った。
- 難しさと共に面白味も感じられた。
- 評価してもらい、売り方見せ方などに工夫が必要だとわかった。
- 実物を見ながら、特徴や工夫できる部分が理解しやすかった。
- 職員が代わり悩みもあったので、相談が自信につながった。
- コンティオやみんなのグッズ化への情熱と探求心に感銘した。
- 各施設のグッズから工夫やプライドが伝わる一方、担当職員の独断で進む懸念もあり、業務との兼ね合いの難しさも感じた。

織り&グッズ展



【概要】表現の魅力を商品化して出会いにつながる展覧会です。タマップに参加する福祉施設が制作した商品をセレクトして展示・販売しています。

12/19-25 参加13団体+個人作家4名
来場者707名

@工房集ギャラリー

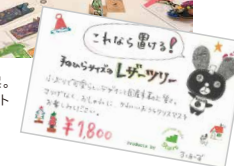
「ツグズムズ17 織り&グッズ展
～きれいだきれいだ
ロマンチックがはじまる。～」

キュレーション: con*tio

【内容】今年度は、ギャラリーにスタンドグラス作品を集めてディスプレイ。形にも色の組み合わせにも個性が光る作品の数々が、会場を色鮮やかな輝きで彩っていました。展示台や壁には、13団体の福祉施設が商品化した織りの袋物や小物、木工、陶器の置物、絵画をデザインした文具などがズラリ。個人作家の手描き商品や手づくり人形、オリジナルアートグッズも、一点一点の魅力が際立つようにディスプレイされていました。クリスマスやお正月に向けた季節商品やカレンダーもあり、多くの来場者が時間をかけて展示や買い物を楽しんでいました。来場した参加施設や作家からは、「制作のモチベーションアップになった」との声が多くあがりました。また、恒例イベントの作家が主体となるワークショップやライブパフォーマンスも、子どもから大人まで幅広い参加者で賑わい、作家同士の交流も見られました。



商品のPOPも参加施設が試行錯誤、すてあーずのPOPのかわいいイラストは施設の作家さんの手描き。



event

作家主体のワークショップ&ライブパフォーマンス

「革小物づくりのワークショップ」

12/21 担当:やどかりの里 すてあーず

手ほどきを受けながら革に模様や色をほどこしオリジナルブローチを制作。

「たのしいお人形作りのワークショップ」

12/22 講師:関口直子

人形作家の関口さんが用意してくれたパーツをもとに自分好みのお人形を創作。



「僕がひとつ、あなたのことを ぼやいてみせましょう」

12/22 講師:金子隆夫

日々、名言をぼやいている金子さんが会話から似顔絵付きのメッセージを色紙に。

「スタンドグラスのオーナメント作り」

12/21 担当:川口太陽の家

自由にガラスの破片を組み合わせて創作。難しい工程も丁寧に指導。子どもたちにも大人気。

■タマップの感想より■

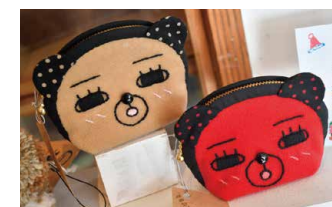
- 他施設の商品を間近に見てヒントを得ることができた。
- 作家の個性を活かした商品展開が勉強になった。
- パッケージやレイアウトの考え方が参考になった。
- ディスプレイのポイントや見せ方も学ぶ機会となった。
- 台紙を変えるだけで印象がすごく変わることを学んだ。
- 毎年コンセプトが明確で来場者も楽しめていたと思う。
- 新しい商品の製作をグッズ展に向けて頑張れた。
- 研修の助言で改良したことで売上にもつながった。
- 普段は単価が高く売れない商品が多く売れて良かった。
- 売上アップも次へのモチベーションにつながっている。

左上:オリジナリティーがあり刺繍も丁寧。さらにストラップが実用性とグレードをアップ。つくり手の愛情と創意工夫が伝わるわっくすの人気商品。

右上:ART(s)さいほくとの連携でつながりが生まれた人形作家カナザワカズマさんが自ら製本した手づくり絵本。

左下:今年度は平日にカフェをオープンしたことで施設の利用者たちも集まり寛いでいました。

右下:ペンのデザインに絵画作品を使った社会福祉事業団あげおの商品。グッズ研修を経てパッケージを改良。手すみの台紙に作品画像と作者名と、どう作品が生み出されたか魅力が伝わるメッセージも記載。



ダンスワークショップ

撮影：武藤奈緒美

Report



身体表現の可能性を発掘し、その魅力を発信するために、2017年から年に数回、ダンスワークショップを開催しています。今年度は、参加者が集うワークショップに加え、初の試みとして、何度も参加して経験を重ねてきた3名の“タマップダンサー”と共に、移動に困難を抱える施設に出向き「出張ワークショップ」を行いました。

7/5 参加者65名、8/9 52名
@埼玉県障害者交流センター

①みんな集まれワークショップ

講師/ファシリテーター

竹中幸子(ベストプレイス主宰)

補佐/ダンサー：遊谷智志、福田京子、吉澤慎吾
音響/スタッフ：杉江尚子

みんなと様々な動きを楽しむ中で、一人ひとりの表現が引き出されていくダンスワークショップ。竹中さんとダンサーは、わずかな動きの中にもその人らしい表現を見つけて、寄り添いながら呼応するように踊っていく。すると不思議なことにどんな動きも力強さと魅力を増し、生き生きと輝いて見えてくる。「それぞれが持つ何か引き出される場ができることが大事。そのために、関係性や距離感をどう保つかを大切にのぞんでいます」(竹中)。

初回は、過去最多の65名が参加。初参加の人も多かったが、一緒に踊る中で参加者同士も、それぞれの表現を称え合い、共鳴して、みんなの動きが躍動。気づくと会場は、多彩なダンスとエネルギーで満ちあふれていた。「踊っていると一人ひとりから表現力や意識の高まり、踊りたい表現したいという想いが伝わって



動きを追うのをやめ表情を追いかけた
みんな晴れやかな表情をしていた



きました。その個の良さと共に集団としてのつながりが生まれているように感じます」(福田)。

当初は人と触れ合おうとしなかった人が、手をつないでリードするようになっていたり、視覚に障害のある人や車イスの人にも誰彼となく手を差し出すようになっていたり…。いつの間にか混ざり合い、誰が誰の介助者かもわからなくなっていた。「支援という立場を離れ、一緒に踊る中で普段は気づかなかった何かを感じ取ることも、みんなを見守り、輪に入らない人の話し相手をするような存在も、共に表現の場をつくる上では大事な役割だと思っています」(竹中)。

このダンスワークショップでの経験や気づきは、普段の表現活動のモチベーションや支援の学びになっている。「回を重ねることで、以前は踊らなかった人が、今では手を挙げて前に出て踊るようになり、生活の中

でも机を運ぶなど職員の手伝いをしてくれるようになりました。ダンスでの自己表現を通して内面も優しく明るくなったと思います」(福祉施設職員)。

コロナ禍の2022年度には、ダンス公演も行った。時には悩みながら経験を重ね、表現の可能性を広げてきたタマップダンサーたちには、今回、自分の表現で場を盛り上げながらも周りを気遣い、全体を引っ張っていかうとする意欲が見られた。「独自に踊りのスタイルをつくり、自信をつけ、ダンサーとしてのプライドを持つてのぞむようになったと感じます」(竹中)。

刺激し合い、成長し合い、周りから憧れられる存在にもなっている。

一方、参加したくても移動に困難を抱える施設もある。そこで、出張ワークショップを企画。タマップダンサー3名とチャレンジした。



最後は全員で感想を共有。福祉施設職員からは「あんなに楽しめるとは思わなかった」「普段と違う一面が見られた」など参加者の変化に驚く声や、アンケートには「次回が楽しみ」「また頑張ります」といった意欲的な声が多く寄せられた。



今年度は初めて「茶話会」も開催。お茶とお菓子を楽しみながらダンスへの想いを語り合った。



事務局では、活動を広く発信し、個人で表現活動をしている人などには、新たな一歩になればと直接、声を掛けている。今年度は県内外からの一般参加者も多く、事業の広がりが感じられた。

■ファシリテーターを目指す外部参加者からの質問—

○今日もそうですが、ダンス公演の動画からも、それぞれの個性が見えてすごいなと思いました。とても難しいことだと思いますが、どのようにクリエイションしたのか教えてください。

「特別なことはしていません。いつも自分が何をいいと思えるかを大事に、誰かがいい動きをしたら、活かすためにどう寄り添えるか考えて動く。すると自然にそれぞれの動きが浮き立ってくる感じです。公演の頃はコロナ禍で、ダンスをしていいのかわりましたが、タマップのダンサーたちの作品を見て、その表現は、生きることそのもの。自分も同じで踊ろうとしたのではなく、生きよう、体なら何かできると思ったのが出発点だったと改めて気づき、公演にのぞむことができました」(竹中)

■感想より—

- みんなの情熱が伝わってきた。
- お互いが響いてきた。他の施設のみんなも楽しそうに踊っている姿に感動した。
- 人見知りだが、みんなの踊りを見て楽しめるようになった。
- いつも先生の声掛けのタイミングがいい。音楽が止まったら近くの人と形をつくる動きなど、初めての人も友達になれてうれい。
- 誘ってもらえてうれしかった。エネルギーをもらえた。
- 頭やひじをくっつけ合う動作では、いつの間にかごちゃ混ぜになり遊んでいた。支援者が利用者か関係なくなる貴重な体験だった。
- こんなにたくさんの障害のある方と、自然発生的なダンスと一緒に表現をつくり出すことは初めて。貴重な経験になった。
- 個々の特性を理解し表現を引き出すアプローチが学びになった。

「大地」は肢体不自由・重度重複障害のある人々の入所施設として2002年に開所。約30名が暮らしている。

9/2、10/9 参加者共に約30名
@蓮田太陽の里「大地」

②出張ワークショップ

講師/ファシリテーター：竹中幸子(ベストブレイス主宰)
補佐/ダンサー：澁谷智志、福田京子、吉澤慎吾
音響/スタッフ：杉江尚子
アシスタント/タマップダンサー：片波見知代、阿部美幸、関翔平



音楽やリズムに合わせて自由に体を動かす約1時間半のワークショップを2回行った。大地の利用者は多くが車イス。言葉でのコミュニケーションが難しい人、医療的ケアが必要な人も多いため、まずは、朝のラジオ体操から一緒に少しずつ体を動かしていった。そして輪になり、音楽を流してダンスを開始。最初はみんな見ているだけだったが、ノリのいい人がダンサーと一緒に踊り出し、車イスでまわったり、脚を高く動かしたり…。次第に介助を頼んで前にも出る人も増え、全体の動きが大きくなっていった。

そしてグループになると、それぞれが力いっぱい得意な動きを披露。指先を踊るように動かしたり、口を開けて喉を震わせたり…。その一人ひとりの魅力を探るようにタマップの3人がダンサーと表現を真似ると、さらに動きはダンスとなり、肢体を大きく動かさない人たちの目や顔の表情も豊かになっていった。

ダンスの中では、スタッフや利用者同士が気遣う様子も多く見られた。「日常での関わりで土壌づくりをしてきている空間では、みんなの表現が自然と浮き上がってくるように感じます」(竹中)。

2回の開催を終え、受ける側、実施する側の双方から

継続を望む声が多く聞かれた。「いつもと違う自分に变身できるのも踊りの魅力。ダンサーが出向き日常に、特別な踊る非日常の空間をつくることに意味があり、今回、その意義を強く感じました」(竹中)。





■振り返り—

滋谷/ダンサー: 重度障害の方とのダンスは初めてで、何が出来るか不安でしたが、回を重ねることで、僕らもみんなも緊張がとけていった。

竹中: ほぼ全員が車イスというのは私も初めて。不安はありましたが、期待通り、楽しめました。

植村/施設長: タマップの3人がいたことで、施設の利用者たちも緊張がほぐれたと思います。

宮本/アートセンター集: 3人は、「みんなとダンスがしたいよ」と言ってるので良かったです。

吉澤/ダンサー: 3人がクッションの役割をしてくれて、僕らもありがたかったです。

北岡/施設職員: 可動域が狭く自分で動けない人が多い中、どこまでできるのか心配でしたが、普段あまり動かない人も楽しそうに手や体を動かし、2回で終わり知り残念が残っている人もいました。

植村: レクリエーションや単に音楽に合わせて踊るダンスとは違い、一人ひとりが自分の体で表現でき、主人公になった。戸惑いはあっても、のってくれる人が多く、イヤと拒む声が聞かれませんでした。

竹中: ラジオ体操から入りましたが、それとは違う、表現だったと捉えてもらえてうれしいです。

植村: 普段は絵を描いている、言葉で伝えるのが困難な人も、最後に自分で感想が言いたいと伝えてきた。ダンスでのいろいろな人の関わりの中で、きっと弾むように心が動いたのでしょう。

福田/ダンサー: 一所懸命に手を動かし、絵を描く動きもしてくれて、表情から読み取れない部分はあっても、表現しようとする気持ちが伝わってきました。他のどの方も、声を掛け促すと、目一つ、指一本だけでも動かし、それが表現になっていた。

宮本: 私も一緒に踊ることで、みんなと対話するように体でコミュニケーションしている感じを実感できました。

植村: 自由に体を動かし、その自分の動きでいいのだという想いを、引っ張ってくれる役割が大事だと気づきました。

吉澤: 寄り添い、一緒に模索するのが僕らの仕事です。どうアプローチすれば動くのか、場を立ち上げられるのかは僕らの課題ですが、もっと回を重ねれば、すごいダンサーが生まれる期待と予感を感じます。

竹中: 障害のある人の動きは、場の空気や周りの人の心を揺さぶる、表現としての可能性が、とても大きい。そのアートの

可能性を引き出すことは、私だけではできません。今回は、3人のタマップダンサーと一緒にやる意味と、体の立ち上がり方をアートとして深めていける可能性を感じることができました。

関/タマップ: 2回、なんとかできて良かったと思います。ダンスは楽しい。またいつか来たいです。

竹中: 関くんは7年前、スタッフから体を動かすことは苦手と紹介されたのが、嘘のよう。阿部さんは、少しスランプの時期もあったけど、ここでまた新たに開花した。ダンスは人を変える力がある。今日、改めて感じました。

阿部/タマップ: 疲れたけど楽しかったです。良かったです。またやりたいです。

片波見/タマップ: 今までのワークショップとは全然違った。初めての方とも、コミュニケーションがとりやすく、踊りやすかった。

竹中: 片波見さんは率先して相手を知らうとする関わり方が素晴らしかった。今回、私を含め全員の勉強になり、成長につながったと思います。

植村: 利用者同士が想い合い、ダンスを通して気持ちを伝えようとしていることが感じられました。施設内でも絵や書や織りの仕事と同様、今後は体で表現する時間も定期的につかっていきたいと思います。

— 大地にダンスの花がひらきはじめています。



触れることで通じ合っている
想いのやりとりが見えてきた



最後にタマップダンサーの3人が踊りを披露した。

■施設職員の感想より—

- 戸惑いながらも、先生の動きをよく見ていた。
- 普段はイベントに参加しない人も積極的に楽しんでた。
- いつもは途中で帰る人も、最後まで参加していた。
- 集団活動が苦手な人も率先して準備や片付けをしていた。
- どんな動きができるかをダンサーが探り、参加者がそれに応えようと頑張る姿が印象的だった。
- 一人ひとりが注目される機会があり、それが自信につながっていると感じた。
- 乗り切れない場面もあったが全体として良い刺激になった。
- 外からの刺激を受けてみんなの可能性を感じた。

講師プロフィール: 竹中幸子

聖心女子学院教諭、県立川越女子高校非常勤講師等を経て、ウォルフガング・シュタング、アダム・ベンジャミンらのワークショップに触発され2000年、障がいのある人を含むダンスグループ「ベストプレイス」を発足。久喜市を拠点に、年齢・性別・障がいの枠を超え共に生きることの可能性を探るダンス活動を展開している。



演劇で新しい表現を見つけるプロジェクト

【概要】 昨年度から身体表現の可能性を広げる試みとして、アーティスト(俳優)が施設を訪れ交流しながら、新たな表現を探る連続プログラムを始めています。今年度は、施設の日常からテーマや課題を探り、丁寧に関係性を育みながら、それぞれの内面が自然と現れる時間と場を、みんなで作って上げていきました。



【内容】 昨年度は「日常と地続きで楽しめる演劇的な表現」を探りながら、みんなで作る魅力や再発見、演じる喜びや豊かさを共有。施設の日常を表現が生まれる場として捉え直すことができました。今年度は、施設の日常に豊かな交流と表現をもたらすことを目指し、毎回、施設職員ともミーティングを重ね、日常から4回の演劇的プログラムを立ち上げていきました。

6/7、7/12、9/3、10/1
参加者(施設利用者・職員)32名
@大宮太陽の家

アーティスト 大石将弘(俳優)
アシスタント 小山薫子(俳優)
アーティスト
企画: 藤原颯太(一般社団法人ベンチ)、アートセンター集
コーディネート・記録: 原田恵(一般社団法人ベンチ)

第1回 6月7日(金)

日常的に施設で行っている活動の紹介を兼ね、お互いに自己紹介。その触れ合いから人柄やこれからの表現活動につながるヒントが見えてきた。

第2回 7月12日(金)

1回目の活動の中から、各々が好きな遊びをモチーフにかるたをつくり、表現する時間を設けた。互いの創造性が発揮された場となり、今後の制作に向け「関係性を深める」というアーティストの課題も発見することができた。

第3回 9月3日(火)

日常をより知るため、アーティストと一緒に散歩。後半は、見つけた音やものを発表し合った。各々の視点や想いを知ることができ、関係性が深まっていった。

第4回 10月1日(火)

これまでの総括として、何ができるか改めて事前に職員と打ち合わせ。「好きなこと」をテーマに各班で作品づくりを行い、全体で発表。体で表現する喜びと、発表する・見るという楽しみを共有する場を、みんなで作って上げることができた。

詳細なレポートは / WEBにて公開!



■施設職員の感想より

- 各々の言葉や行動を演劇として捉えてあげ、個性が引き出されていった。
- 大石さんたちの引き出しが多く驚いた。各々の自然な姿が良かった。
- 普段とは違う姿がたくさん見られた。
- 以前はできなかった自分の表現をする姿も見られた。
- 積極的な参加が難しい人がいる中、「みんな」という気持ちが全員に感じられた。

- みんなも大石さんたちの魅力を感じて表現していたように感じた。
- 全員の好きなことが何かを改めて知れたのも良かった。
- 「普段の場」に焦点を絞る視点が変わるような経験になった。
- 表現する姿を外に広げること、ありのままを認め合うことが大切だと感じた。
- 全体でイベントをするいいきっかけになったと思う。



ネットワーク活動の振り返り

タマップの定例会とアンケートで、一年間の活動を振り返りました。



■企画展の設営・運営の振り返り

- 搬入搬出も作品を見たり他の施設職員と話したり良い経験になった。
- 年々「みんなで作る」感じが強くなってきていると思う。
- 展覧会としてのクオリティーが上がったこともあるが、広報活動もタマップの参加団体で頑張ったことが来場者数につながったと思う。

■一年間を通しての学びや気づき

- すべてが初の体験だったが、具体的に学べる機会が多かった。
- 専門家や他施設の意見を生で聞くことから多くを学べた。
- 様々な作品を実際に見ることができて、とても参考になった。
- 障害者アートの考え方やもたらす影響を感じることができた。
- 同じ志を持つ人たちと情報交換できる良い機会だった。
- 施設での課題などを共有できる機会となり励みになった。
- 一番の財産は他施設の職員とのつながり。支援のヒントや作品制作、商品化など多くの刺激をもらい、毎回楽しく前向きになれた。

○事務局を通じて施設利用につながった個人作家がおり、タマップの活動が仲間や居場所を求めている人の拠り所になると改めて感じた。

■施設での活動や利用者、職員の変化

- グッズ研修の助言を施設内の商品化に活かすことができた。
- グッズ展でヒントをもらい新たなグッズづくりが始まった。
- 企画展やグッズ展の学びを施設内や地域での展覧会や展示、販売に活かすことができた。
- 企画展を通して出展作家の作品制作への意欲が変化している。
- 出展作家だけでなく周りの仲間も表現活動を意識するようになった。
- グッズ展での販売が利用者のモチベーションアップにつながった。
- 自分自身の施設利用者の表現への向き合い方や考え方が変わった。
- タマップでの学びを施設の会議で報告して共有することで、他の職員の表現活動への意識が少しずつ変化している。

■今後について

- 今後も企画展などを通して様々な人と関わり色々なことを学びたい。
- 表現をもっと知るために、作品選考前の研修を継続したい。
- 音楽活動の研修を今後どのように発展できるかが楽しみ。
- アートと音楽が混ざり合ったイベントができれば面白そう。
- 各施設での表現活動のポイントや工夫を知りたい。
- 各支部の交流を深めるために何かできたらと思う。
- 各施設の利用者合同で何かできたらと思う。
- 施設の利用者の作品を展示する機会を増やしたい。
- 利用者家族の理解を得るためにも地域での展示を企画していきたい。
- 利用者が地域とのつながりを深められる活動をしていきたい。
- 一人ひとりの表現を引き出しているような活動をしていきたい。
- 埼玉県での表現が毎年レベルアップしていることに少しプレッシャーも感じるが、利用者の個性を大切に、表現活動を継続していきたい。

相談窓口

アートセンター集の相談窓口では、障害のある人やその家族、支援者の「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートしています。

障害のある人やその家族、支援者からの「作品を発売したい」「アート活動を始めたい」といった表現活動に関する相談のほか、障害のある人の作品を「活用したい」「展示したい」「学びたい」といった地域の方々や企業などからの相談も受け付け、県内の福祉、アート、教育、行政、司法などの専門家や専門機関と連携しながら対応しています。



相談対応事例

多方面から創作活動の場への見学依頼

福祉をはじめ教育、行政、企業など多方面から見学依頼が増え、見学後、創作環境や商品化、権利に関する相談などにつながるケースも増えています。

作品等の権利に関する相談

企業から作品の二次利用の依頼を受け、契約内容や進め方に不安を抱えているケースも多く、弁護士につないだ事例もありました。

障害者アートにまつわる広報協力

全国的に障害者アート関連の公募展やイベントが増加。タマップのSNSなど広報媒体を活用し協力しています。

個人への対応と他機関との連携

当事者や家族からの相談は、すぐに解決できないケースも多く、自宅で制作をしている相談者に、1年がかりで対応した事例もありました。想いを受けとめながら、地域の他機関等とも連携することで、良い結果が生まれています。

相談実績 (2024年4月～2025年2月)

総数 294件 856回

件数は新規の相談数、回数は相談対応回数です。

相談者	件数	回数
障害当事者	40件	135回
家族	10件	27回
障害福祉関係者	89件	239回
文化施設	15件	45回
芸術家・文化団体・文化関係者	22件	70回
市民団体	8件	33回
教育関係者	25件	77回
医療機関	1件	2回
自治体	17件	42回
企業	48件	135回
報道機関	4件	10回
その他	15件	41回

分類

美術	197件	581回
音楽	10件	37回
演劇	5件	11回
舞踊	3件	7回
その他	4件	10回
分類できないもの	75件	210回

相談内容

鑑賞	7件	17回
創造	26件	55回
発表	35件	130回
交流・連携	2件	4回
調査研究・保存	4件	11回
権利保護	85件	257回
人材育成	8件	29回
情報発信	34件	102回
その他	16件	38回
見学依頼	58件	157回
出展依頼	19件	56回

情報発信

アートセンター集では、普及支援事業や県やタマップに関連する情報と、表現活動に役立つ障害者アート関連の情報の収集・発信に努めています。今年度は広報の成果でダンスワークショップや権利保護研修への一般参加が増え、新たな交流が生まれ活動にも良い刺激になりました。

企画展の広報では、タマップ参加団体や関係機関を通して県内外にチラシを配布。メディアにも情報を伝え、毎年度、新聞に掲載されています。公式サイトやSNSでは、事業関連の情報だけでなくタマップ参加団体の催しや県内のイベント、全国的な公募展などの情報も発信しています。企画展の会期中はSNSを活用し、随時、来場した出展作家の紹介やイベントの様子を投稿。今年度はSNS等での広報協力依頼の相談も増えており、認知度が高まっていることを実感しています。

展覧会チラシ

埼玉県障害者アート企画展



織り&グッズ展



メディア掲載

東京新聞

2024年12月28日
土曜日 朝刊最終面

埼玉県障害者アート企画展で行った埼玉県立近代美術館との連携プログラム「ことばでみる鑑賞ツアー」の様子が大きく掲載されました。



ホームページ・SNS

アートセンター集公式サイト



タマップ
Instagram



tamap_saitama

地域での連携事業

アートセンター集では、地域の様々な団体や機関と連携して表現活動の輪を広げています。



「第25回彩の国セルブまつり」に参加 展示・販売

6/1 @鐘塚公園
県内の障害福祉サービス事業所で構成する埼玉県セルフセンター協議会により開催される、今年度は28施設が参加した大イベントの中で、作品展示とグッズ販売を行いました。



「大宮競輪Heartfulアート 2024(障害者アート×大宮競輪場)」に参加 見学 作品制作 展示

@大宮競輪場
障害者アートの活動支援と競輪場内の美観向上を兼ねた作品公募企画に参加。「競輪」「居心地の良い場所」をテーマに創作し、採用作品は施設内にパネル展示されました。応募前には見学会も実施。受賞式も行われ、作家たちのモチベーションアップにつながりました。



受賞作品がパネル展示された壁面

公共施設に アートパネルを常設 展示

@埼玉県障害者交流センター
文化芸術、スポーツ、研修などの様々な機能を備えた、障害のある人の社会活動の拠点施設内に、県内の作家のレプリカ作品が展示されています。作品は、企画展出展作品の中から、展示施設職員の投票により、小幡海知生さんなどが選ばれました。



わいわいギャラリーの展示の様子

展示・講演 中学の鑑賞授業や講演に作家が協力 10/21~25 @上尾市立原市中学校

生徒会の生徒が中心となって、校内に「工房集」の作家12名の絵画や立体作品を展示。展示には企画展のポスターも掲示し、タマップの活動紹介にもつなげました。作家も展示を見学して生徒や教師と交流。また、後日、4名の作家が人権講演会に登壇しました。



「関東社会就労センター協議会 研究大会in埼玉」で県と活動報告 活動報告・見学受入

10/21、22 @ウエスタ川越
埼玉県セルフセンター協議会主催の大会で、実践報告「就労支援における『公助』を改めて問う」に、県職員とアートセンター集の担当者が登壇。官民協働の取り組みとタマップのネットワーク活動について語りました。会場ではグッズの展示販売も。また、タマップ参加施設でもある「川越いもの子作業所」と「工房集」「川口太陽の家」で、参加者の見学を受け入れました。



TAMAP+O 研修会 (番外編) 「面白いぞ音楽!楽しいぞ音楽! 音楽表現の魅力を感ぜよう」 3/14 @埼玉県障害者交流センター

音楽活動の楽しさを広めるべく、タマップ初の音楽分野の研修が特色型支援センター「ART(s)さいほく」の主催で開かれました。第1部は、福祉施設で結成された4組のバンドの生演奏。第2部は座談会。音楽表現の魅力や課題を参加者と共有しました。



にじいろ 冒険記

By 関 翔平 (工房集)



埼玉県障害者芸術文化情報

埼玉県では、障害のある人が創り出す作品の魅力を多くの方に知っていただきたく、美術展やダンス公演などを実施しています。文化や芸術は、新たな価値を社会に生み出すとともに、多様性を尊重し、人と人との相互理解を進める力があります。この文化・芸術の力により、多様であることを認め合う豊かな共生社会、心のバリアフリー、障害のある人の社会参加を推進します。

2009年から続く「埼玉県障害者アートフェスティバル」の実行委員会を中心に様々な参加イベントや普及事業を行っています。※玉線は「障害者芸術文化活動普及支援事業」に関連する取り組み

2024年度 主な事業

◇埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会事業 ◇同会共催・協力 ○県補助事業

芸術性・創造性あふれる障害者アートの魅力発信

- 【美術】 ◇埼玉県障害者アート企画展 ◇埼玉県障害者アートオンライン美術館
◇障害者アート魅力発信事業(①障害者アートの常設展示 ②障害者アートの利活用推進)
- 【舞台芸術】 ◇バリアフリーコンサート ◇障害者ダンスチーム「ハンドルズ」公演
- 【共通】 ◇各種イベントにて障害者アートを展示 ※実施記録は下記に掲載

障害者の芸術文化活動の裾野拡大

- 【美術】 ◇障害者絵画展(希望者全員の作品を展示する公募展)
- 【芸術文化体験】 ワークショップ(◇打楽器 ◇スティールパン ◇書道 ◇ステンドグラス)
- 【市町村事業の実施促進】 ◇市町村ワークショップの開催支援
- 【芸術文化活動普及支援事業など】 ○障害者芸術文化活動支援センター ◇表現活動状況調査

2024年度のイベント等での作品展示

5/3~5/6 @けやきひろば

「VIVA LA ROCK 2024」

作品レプリカの展示、フラッグ作品への2次利用、ライブ招待鑑賞、ライブ出演



5/29~6/20 @埼玉県立近代美術館

「第72回埼玉県美術展覧会(県展)」

作家11名の作品を展示



12/1 @吉見町民会館 フレサよしみ

「障害者絵画展」

埼玉県障害者アートオンライン美術館

#SAITAMA #障害者アート
オンライン美術館



今年度は20点余り増やし、100点を超える作品を学生が書いたレビューと共に紹介。創作風景の動画や関係者の寄稿文も追加しました。



障害者アートの利活用推進 デザインやリリースに！作品をマッチング

埼玉県では、魅力的な障害者アートの利活用を推進する取り組みとして、企業や団体に作品の紹介、作家が所属する福祉施設の紹介などのマッチングを行っています。障害のある作家の作品は国内外で注目を集めており、近年は採用も増えています。タマップ参加施設とも連携し、今年度はその仕組みも整えました。

利活用のポイント

- 心に残る独創的なデザインになる
- 個性あふれる作品がお客様との話題になる
- CSRやSDGsの取り組みにつながる …など

活用例

- デザイン利活用:うちわなどのノベルティグッズ、広報紙の表紙、イベントのフラッグなど
- 作品リリース:ロビーや応接室、カフェなどに展示

ホームページでは、企業や団体の活用事例を紹介しています。リリースやデザイン利用が可能な作品一覧(サイズや作家紹介文も掲載)もダウンロードできます。みなさまぜひ、ご活用ください。



お問い合わせ | 福祉部障害者福祉推進課 社会参加推進・芸術文化担当 | 電話048-830-3312

2024年度の利活用事例

10/1~11月

「あれもこれもダンス展」へ作品レンタル

彩の国さいたま芸術劇場30周年大感謝祭オープンシアター！
「ダンスのある星に生まれて2024」の関連企画に作品を31点提供。

8/24_31

KADOKAWA CRAFT ROASTERY & CAFE 鑑賞ワークショップへ作品レンタル

子ども向けの対話型鑑賞ワークショップに作品を2点提供。
終了後も11月までカフェへ展示用に作品をレンタルしました。



2024 topics

8/6 「埼玉県造形教育研究大会」への作家紹介

美術教師の研修に作家が講師として参加しました。

埼玉県美術教育連盟主催の小中学校美術教師向け研修会の分科会に、工房集の作家3名と職員2名が参加。作家が講師となり、作品鑑賞や意見交換を行いました。



8/11 埼玉県障害者交流センター夏休み企画の 創作ワークショップへの作家紹介

工房集のステンドグラス作家4名が講師となりワークショップを行いました。



「令和6年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

art center syu 2024 report

みんなでつくる 埼玉方式

2025年3月28日発行

企画・発行：社会福祉法人 みぬま福祉会

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445 (工房集内)

TEL 048-290-7355 FAX 048-290-7356

構成・編集：武居智子、con*tio

制作協力：埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±O

アートディレクション：藤沼重人 (Type-f design room)

写真撮影：鈴木広一郎、武藤奈緒美、原田恵、武居智子、長崎剛志、工房集

グラフィックレコーディング[研修]：野際里枝

漫画制作 [P36]：関 翔平 (工房集)

デザイン[題字・ロゴ・タマップくん・企画展ロゴ]：水川史生 (en design studio)

原画制作 [題字・タマップくん]：尾崎翔悟 (工房集)

© 社会福祉法人みぬま福祉会・埼玉県

※無断転載厳禁



❁
art center syu ❁

❁
<https://artcenter-syu.com>